

【国語教育】

アメリカ一般教育における国語教育の理念

泉井久之助

つて来る。

しかし「国語」の教育は、教育学的な種々の分野の研究が盛に進められているアメリカでも割合に後れている方かと思われるので、特にきわだった新教育、新生面が随所に実行されているようにも私には思われなかったし、今からふりかえて見ても、それはやはり一般的ではなかったように思う。古い中世からの「国語」教育の方法の流れは、やはり中々抜け切ることのむづかしいもので、そのアメリカ化をこくわずかに進めただけの様な様式が、まだ中々方々の、ことに田舎の学校では、多く行われているのである。

二

けれどもアメリカは科学的なアイディアを実生活に活発に移している国である。科学的、技術的な考え方や、ものの操作は、日の生活において、日に日に盛になっている。この種の用語やいまわしの日々の新聞や雑誌にあらわれるものもまた、まことに多い。政治家がその政策の発表や政情の解釈をするときにも、今では古典に根ざす表現をかりるかわりに、最新の科学や数学にお

アメリカ一般教育における国語教育の理念

われわれが生れてからこの方、ひたすら習いすんで来た国語の知識的な基礎ができるのは、アメリカでも日本と同じように十才から十二才のころである。それまでは柔軟な頭によってただ一途に吸収につとめて来た国語の蓄積も、ここでやや批判的な眼で見直すことも、そのように指導さえすれば、一応はできるようになる。発音行為の基本様式が漸く固定して来るのも、この頃である。世に立つための積極的な言語(国語)の教育がやや反省的に行われはじめるのは、アメリカでもやはり中等学校においてである。

子弟の教育の年限が短く、子供をそのまま早く社会に出さなくてはならなかった昔は、早くから軟い頭に硬い陶冶が国語教育に關しても行われたことは、これまた日本におけると同様であったが、年限の長いことが一般に許されるようになった今日では、硬いよりも広い教育、受動的よりも自発的な教育を尊んで、早くから「硬い」教育をしようとはしない。やや硬い、文法的に積極的な国語の「陶冶」もそのはじめは漸く中等学校に入るころにかか

ける用語やいまわしを利用して新味と共に、いかにも政策は精切だという印象を与えることにつとめる有様である。かねてまた、言語の情意的な使用もまた、一方では毒々しいほどにはげしい。アメリカの商品の新しい広告の文句は近頃日本にも盛に入ってきて来るようになったが、つましなかった(？) われわれから見ればよくも云えたものと思うようなはげしい言葉でわれわれを、その思うところへ引込んでゆこうとする。精切なことば使いをしてゐるのも、いかにも客観的な表現だと信じこませることによつて、実はわれわれを釣り込むことを意図してゐるかも知れないのである。ことば遣いのはげしく荒いアメリカでは、聞く方もまた適当に用心しなくてはならないことがある。こういふことば遣いは、文字として印刷されたものを見ていてさえ、いかにも幅の広い声で叫ばれているように思われて来る。新聞、映画、ラジオ、それに美しい色彩できれいな紙に印刷された雑誌、——これらによつて叫ばれることばには、真意の直ちに見えなくともあるが、しかしそれでいて、やはり人は何ほどか動かされているのである。それが更に精切らしいことばで書かれてゐるとき、人はそのまま引きずられてしまふかも知れない。現代に生きて読む人、聞くひとは、そこに語られ叫ばれることが、事実をいかに歪曲しているか、その暗示や指示に従ふことが結果においてみずからの幸福となるか、呼びかけは一体自分の理知に対して行われているのか、むしろ全く非合理的な衝動を操る目的で働きかけているかを、自分でよく判断しなくてはならない。アメリカは言語使用における Pragmatics が、きわ立つてはげしいところである。だか

らしてハヤカワ氏のような研究も行われ、それが実生活的にアメリカの人心にアピールするだけの地盤もできてゐる。

私はシカゴでハヤカワ氏(この人は日本語がほとんどできない)をたずねて数時間をすごしたが、その席にはシカゴ大学で「生物数学」Bionmathematicsを教えているラボポート氏をも呼んでくれて、Linguistic pragmatics の話を種々かわすことができた。ハヤカワ氏の研究乃至運動はコーズユプスキーからでている。私はワシントンでコーズユプスキーの Science and Sanity (by Alfred Korzybski, Lancaster Pa. and N. Y, 1933) のいう非アリストテレス的理論というのを興味をもつて読んでいたので、この話が自然、対談の中心となつたが、それはここでは長く述べる必要はあるまい。ただ簡単にいえばアリストテレスから糸を引く従来の形式論理的な考え方は、われわれの頭のはたらきの自然の理法にかなわないものであつて、その論理、つまり三段論法というものはわれわれの實際経験のほんの一部の特種な場合を整理して成文化したにすぎない。すべて人は死ななくてはならない。しかるにもし太郎が人間なら、太郎は死ななくてはならない。これがアリストテレスの論理の形式である。その論理の形式には一応例外はないように見える。しかし、すべて赤い花は君の花壇にある。ところがグビジンソウは赤い、とすればそれは君の花壇になくなくてはならぬ。このようにいうのも「型として」はまた形式論理の方式に違つたい方である。しかし実際にはグビジンソウはどこにもある。赤い花も君の花壇になくなくてはならないことはない。つまり形式論理はその真理性に様々の段階と適用の場の

定めがあつて、特定のせまい場合に限定しなくては全幅的に通用しないのである。とても一般論理ということではできない。ユークリッドの幾何学が特定の空間だけにしか適用されないように、アリストテレスの論理も一般にはつまずきが多くて、これに拘泥しては精神の自然な廻転にも悪い作用を及ぼしてその「衛生」Pragmaticsにも悪い。もっと近代数学、近代物理学の円滑自然な理法に従うべしというのがその趣意であるが、とにかく真にわれわれが言語的表現に関してそれを論理的ということが出来るのは、その言語使用が実生活、真生活に根を下し、その真であるか否かが、この世界におけるわれわれの素直な広い実際の経験的認識に照して間違いない場合においてであつて、言語の真に論理的な使用は、それがわれわれの経験する世界をあやまりなく、成心なく、従来の形式に拘泥せずに、再現するときに見出されるものにはかならない。大久保氏の好訳を得てわが国でも公にされたハヤカワ氏の書物に対して、原著者に申訳ないような紹介の文章が先日も発表されていたが、それは右のような立脚点を全く逸していたからだと思われる。ハヤカワ氏はこのような地盤の上に立つて、言語の Pragmatics を研究し批判しているのだから、それともかの国での言語使用が日本よりずっとはげしく、たとえハメをはずしてでもひたすら効果をねらう傾向が、一般社会に激烈なことが豊富な材料をあたえたからである。しかもそれが手をかえ品をかえて、或は激情的純情的に、或は冷静思索的分析的な姿をとつてあらわれると、受取る方はそれに対して常に理知的な理解と、言語使用の分析を忘れてはいられないのである。一般

の人々が日々浴せられる言語の波のなかに、宣伝と事実とを識別し故意と真意とを弁別することは、ひいてはアメリカの世情の安定を維持する上にも必要になつて来る。アメリカ流にいえば、デモクラシーの将来がこれにかかつているといふことになる。

三

こういう事情の下では、一般教育における「国語」の時間にも、ひたすらイギリスの古典文学の作品を修々と読み味わつてばかりはいられないのも、われわれとして考えられることである。先づ生きた日常の言語の効果的な使用とその正しい解釈という方に主力が注がれるようになって来るのは自然である。これは喫緊の大事である。どうしても言語の Pragmatics に力点がおかれなくてはならない。

このブラグマティクスというのは、アメリカでも近頃盛な記号理論 theory of signs* から私が借りて来た用語であるが、この

* たゞせば L. Bloomfield, Linguistic structure of science, 1939; 4th. ed. 1948; Ch. W. Morris, Foundations of the theory of signs, 1938, 7th. ed. 1951. (この二冊はそれぞれ戦後 International encyclopedia of unified science, Chicago, 1951, 2, 24-26) R. Gärdenberger, Zeichen, Stuttgart 1932; A. C. Fenjamo, The logical structure of science, London 1936. など私はまだ十分に理解するものが出来なかつた。R. Carnap, Logical syntax of language, London 1937 (Wien 1934); Philosophy and logical syntax, London 1957. キャロル氏一派の "General semantics" の機関紙には雑誌 FTG. があつて私も寄贈をうけてゐる。A. Kraft, Der Wiener Kreis, Wien 1950.

語はもろろん例のプラグマティズムに対して無関係につくられたものではない。プラグマティズムが従来行われた以上に、「もの」とその使用者ないし解釈者との関係に注意をそそぐことにおいて、その大切な意味があるように、プラグマティクスは、記号とその使用者、殊にそれを理解する人における知的な活動との関係を重視する記号理論の一部面である。だからジェイムズやデューイーや、ミードのようなプラグマティズム人々の理論とよく合うところもあって非常にアメリカ的な色彩と匂いする考だと思われるのであるが、プラグマティクスでは、ことにその理解者というのが生きてゐる有機体としての人間であるから、自然、その記号が、生きた人間の心理的・社会的の諸面と交錯する様相を注意することになって来る。これはわれわれの言語的「経験」の分析ということである。アメリカの現在の「国語」の教育はこの新しい生面に進まなくてはならなくなつてゐるのである。

しかしそれもあの広い全土に亘つて注意し実行されてゐるかといへば、まだ中々そこまで徹底し切れることは出来てゐないのではないかと私は思われるのである。私は滯米中、各地の大学や研究所はよく訪問したが、中学校の国語の教育には実際にふれる時間の余裕も少く、また専門のことだけに追われていて、実はその方をふりむくいとまも少かつた。しかしこの問題について一応の概念を持つことができたのは、コロンビア大学の北側にあってこの大学と「対立的に合併」されてゐる Teachers College (この「先生学校」は中々権威がある)を訪ねて若干の文献を見、また、関係の人々と話することができたためであつた。そしてそ

の結論的な印象は右に述べたような「印象」、もしくは予想予感と異らなかつたが、要するにアメリカの国語教育は、旧来の方法や方向からは右のように次第に転廻しつつあるのが進んだ学校ではみとめられ、それを新しい教育方針はむしろ積極的に推進するように努めてゐるといふのであつた。

アメリカの国語教育もプラグマティクスの重視と、他面、自然科学の新しい目ざましい発展に刺戟されて、今、新しい道程を辿ろうとしてゐるのである。それには次のような事情もある。

四

全土にわたつて今、大部分の中等学校で行われてゐる英語の教育は、やはり文学、作文、文法、修辭法というような、一種中世紀的な方法であるが、普通これにはなお実用的な言語訓練として、ディスカッションの方法、公演の訓練、それに伴う声の出し方の指導、電話のかけ方、レコードを使って自分の話し方と他人のそれとの客観的な比較というようなものも行われてゐる。これらのうちで国語の「教育」に直接の関連をもつのは文法と修辭法である。

英語の教育において、この二つはその長い歴史を持つてゐる。

これらは英本国での「国語」教育の仕方が、そのままアメリカに移されて以来、いまにつづいてゐるのであるが、今日、その効果と必要性について、若干の疑問が持たれてゐるのは遺憾ながら事実である。西洋の中世には言語文学の教育における「三叉路」(trivium)といわれるものがあつて、これは文法、修辭学、論理学

をふくむものであったが、論理学は近世に入つて次第に別種の学科として言語方面の教育課程から引きはなされて行つた。英語の教育において文法と修辭学が中心的に行われたのは、この *positiv* の伝統を引くのであって、全く因習的な一面がないとはいえない。これは言語を正しく使い、文飾と辯辭に長けることが、當時のいわゆる自由民として社会に出て人の上に立つための大きい手段であり、一方、言語の正しい理解と正しい使用の中に、新しい真理の発見がひそむと信ぜられていたからであつて、この時には、右の「三叉路」は教育の不可欠の手段であり課程であつた。しかし、今日では言語に対する考えも變つてゐる。言語の中に、言語を通じてのみ新しい真理の発見があると信ずる人は、もはやアメリカの教育界には誰も見出すことができないのである。自然科学のいまだ科学らしい姿を取らなかつたときには、今の自然科学者が顕微鏡をのぞき、數式を駆使して現象の解明に努めるような態度で、三叉路の研究にも従つたであらう。けれどもしかしフランス・ペイコンが「新機関」のなかである「市場の偶像」*Idola fori* を戒めて以来、經驗をはなれて単なる文法や形式論理学で新しい真理の発見に到りえないことは誰も知つてゐる。尤も言語の文法的構成そのものにも、それを使うわれわれをして、新しい認識へと進ましめるような一種の産出力はある。言語に内在する一種の先天的な論理性があるためであつて、この論理性が或程度までわれわれの新しい經驗を意識において整理し整頓してくれるからである。しかしそれは或る程度までであつて、その或る程度という限界は、過去の經驗がその光芒を及ぼしうる範圍の新

しい經驗の上までで切れてゐるのである。全く別の新しい經驗、それは二十世紀の新しい自然觀、物性觀にあらわれて来たが、この方面への産出力と、整理力は自然言語の上では何も出来ないものである。況んや修辭学は何の力にもならず、従来の言語にたよる論理もここまではその力とはどかない。

言語には一種の産出力があるとはいへ、その構成の總体は過去における人間の經驗の集積である。教育はただ言語教育にばかり集中してゐられないとする考への起るのは元より、況んやそれによる古文獻、古文学の研究をただそのために一般教育に施すことについても、きびしい批判が起つて来る。

こうしてアメリカでも一方、学的には言語の持つ力の限界の認識がおこり、一般社會的な他面では、その逞しい *positive* な使用に対して、われわれの「幸福」をまもるための修練も大切なことになつて来る。

すなわち学的には新しい經驗を取り入れ、これに追隨して言語をそれに対して文字通り *branch* (当適) たらしめるために、できるだけ精切にして流動的たらしめる動き(流動性において近代の英語は割合によく出来てゐる)がある。他方に實際社会に用いられる表現の分析の重視という現象が起つて来る。言語表現の分析とは、この場合、すなわち表現に対するわれわれの經驗の分析のことである。

学的な方面のことは、主として学界みずからがこれにあたる。それは、一般中等教育が本質的に關係しないことである。中等一般教育において今日重視されているのは社會的な言語經驗の分析

であり、兼ねてその結果の銘々による自覚とその応用である。従って中心はやはりまず分析になくはならない。Commission on Secondary School Curriculum をくむ Progressive Education Association が提唱し、また事実行われんとしているものは、このような趣意に基くものであらうと思われるのである。

こうした事情は日本の場合とは、少々異っていると思われる。日本では新しい量子科学の成果を日常に應用するだけの知識の普及も少く、またその実施を可能にするだけの財的余裕もない。勢い、新しい科学もただ科学として別の世界にあって、世上の人にとっては二十世紀のお伽噺のように映じているにすぎないけれども、アメリカでは現実に目の前でその力を駆使するところまで来ている。従って科学界以外にも、科学的な用語と云いまわしの様式の浸透が著しいだけでなく、またより自然でもある。この云いまわしの様式といえば、一口にいつて関係的な表現の様式である。科学の方では、ものをそのものとして指定するよりも、そのものを成立せしめる現象間の関係の量的決定が第一義的である。近世の科学はすべてこれによって成立している。これは英語などでは、日本語と異って、関係代名詞による文の構成様式があるために、比較的、言語による表現に移し易い。日本語によるこの種の困難を思えば、科学的な表現様式の一般言語に浸透し、またして来た程度の、日本語にくらべて一層容易であり、より自然であったことも理解せられるであらうと思う。しかし文字はあのように易しく、またものの名より、関係の表現に赴く科学の言語では「もの」をあらわす用語自体は次第にその種類が少いのである。

(西洋の新しい科学的哲学書の文章を思い浮べられたい)。
それでいて、アメリカでは一方において、露骨に云えば人を「だます」ような drastic な表現が世上に氾濫するのである。デモクラシーといい、資本主義といい、ファシズムといい、共産主義といつても、実は何をいつているかわからないのである。共産主義者だといわれれば、考えるいとまもなくただ怖ろしい人、国内の敵のように見られ取り扱われる。何だか神の審判 (ordal) にかかったようになるところがある。これらの語のもつ情緒的な内容のはげしさは、アメリカにいた人には身にせまるように如実に感じられるのである。これらは冷静な理性的な語でなく、はげしい情緒語である。アリストテレスの「政治学」の行き方とは何の関係もない。活動のはげしい、そして国土の広いあの国では、これ位のはげしさで呼びかけが行われなければ、全体の統一も維持されず、また、人の注意をも一方に集めることが出来ないのであらうか。そしてアメリカの多くの人々は、普通の人々は、進んでこの情緒にひたり込んでゆくのである。これは政治的に利用すれば一応の効果もないことはない。言語教育に手心を加えることは、どこの国でもすることであり、支配者はこれに不注意ではない。わが国に対しては被占領中、この種の策がとられて今に及ぶことは人の知るところである。一応の政治的效果もあるけれども、長い目で見れば、国をそこなうものであることも、また事実である。アメリカの国語教育の進歩的な行き方はこの魔術を分析することに力を注ごうとし、そしてそれが一般化しようとするのは、アメリカ自体の将来に関しては祝福すべきことである。

う。

冷静な關係の比量による科学的な表現があれば、他方にはげしい情緒的な、或は深く人の心に忍び込む妙妙な言語の使用がある。こうした事情は日本の場合とはスケールにおいて、よほど異なるのである。そしてアメリカの中等程度の学校の一般的な國語教育はこのあの場合に対処せんとしつつ、かねてアクティヴな言語使用能力を養おうとしていることは、先述のとおりである。

しかしアメリカでもアクティヴな使用能力の養成はあまり効果をあげているように思われない。殊に文を草することは、学生には苦しいらしく、私の会った大学生も「作文」の宿題にはことに難澁して、私が見てさえ拙劣な文を書いていた。言語のアクティヴな使用はアメリカにおいても指導のむづかしいもので、特別の才能ある人を除いては、やむを得ざる本人の必要、または本人の熱心と忍耐によって習練するより外はない。

五

言語の *thought* な使用の前にみずからを守るためには、言語を分析してその中から真と偽と、およびその二つの分量を見出さなくてはならない。これはさきに云ったとおり、言語表現について行われるわれわれの経験を分析することになる。従って言語教育ということは、翻ってまた、われわれの経験を分析し、分類し、整理し、判明化するテクニクであり、つまり誤なく考える (*to think straight*) ことを教育することになる。われわれのみずからにおいてすでに或る程度まで整理された世界を抱いているのであ

るが、それも、はじめから言語なき生活を送って来たならば、不可能であつたと思われる。それだけに言語の壘の輪(因習の圍)は怖ろしいのであるが、しかしその世界の整理のされ方は不合理なものばかりではない。これに合理的とわれわれが今の段階において信ずる経験的思惟を加えて更に修正し整理を進めることは、次の段階と時代における思惟と経験の合理化に至る最も効果的な道を用意することになる。それは先ず言語において最も容易に、また最も効果に行われることができる。何となれば言語は、その民族のもつ経験の世界に対する地図のようなものだからである。われわれは先ず地図によって地形を教えられてこの世の生活に踏み出す。次に地形を経験して地図を修正するという過程を今までも繰り返して来た。ただアメリカの今日は意識的に地図だけに強い色彩で画く手法が世に氾濫する。

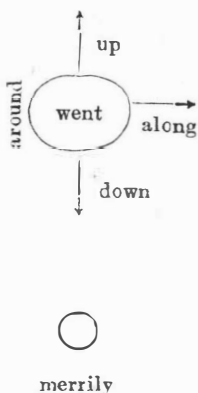
こうして経験の世界に対する合理的な思惟に照らしつつ言語的表現の分析を教えることは、そこに新たな文法を教え、修辭学を教え、真の論理の道行きを描き出すことになって来る。アメリカでは古来のラテン文法に由来する中世的な文法の無力さが痛感されて以来、文法なるものに対する不信がおり、これが文法の知識なくしても言語の使用と理解に不足なしとする一般学生(この種の生徒はいすれの国にも沢山いる)の文法謙遜感と相俟って、英語教育における文法のみならず、右の *thought* の凋落を来したのであるが、また右のように経験の要求に従って言語表現を整理する方途においては文法現象も新たな光の下に興味をもって照し出されて来る。

さて、私がミシガン州のある町立図書館につづく学校の教室に立ち入ったときの話は次のようであった。正面の木板には

They went. They went along.

They went along the street.

と書かれてある。この三つの文のあらゆる情景は、いずれもわれわれはよく理解し、また感じ込むことができる。どれも独立の情景であつて、その表現の受けとり方には何も不足しないという感じがない。つまりわれわれの経験に過不足ない表現である。——しかしこの第二の文の型 (Pattern) は *They went merrily* と同じであるが、しかし *merrily* を使つては、第三型の文をつくることができない。それは *merrily* は *went* に対して元來無縁の、よそのアイディア (foreign idea) をあまけれど、*along* は「行く」に対して本質的に近いアイディア (intimate idea) だからと、教えるのである。つぎつぎに *to go through the street, down the street, up the street, around the world* の例をあげる。



そして第二の *along* を副詞、第三のそれを前置詞とは、その時子供に向つては云わなかった。*along* によつてわれわれが表現する内容は、第二と第三では、別の範疇に入れるほどの区別はないからであらう。英語には實際この程度の流動性がある。尤もこの説明のなかでは、*along* は「行く」ことに対して *intimate* だから他の名詞を直ちに取るができるとする点に、わが国の文法家の間にも問題があらうと思われる。しかし私はこの時、たとえばラテン語の「行く」*eo* が、それに *intimate* な *idea* を示すものを取つて、*in eo* (入る)、*per eo* (通る)、*ob eo* (向う) となるとき、直ちに他動詞化して対格の名詞を取ることを思い浮べて、*go along* が一まとまりになつて一種の他動詞化するものと見ることも出来るのを興味深く思つていた。しかし先生は *along* などに落む心的経験の流動を苦心して説明していたのである。

この様子ならば、*A nail is bent.*

He is bent upon getting revenge.

の二つの *bent* についても、興味ある説明がききえられたかも分らない。何れも受動詞の形ながら、第二の場合は、単純に受動相といいえられないからである。しかし経験的な情景としては本質的な同似性がある。——

私は、この前者を動詞の受動形と教え、後の場合を単に形容詞と教えてゆくことになるのか否かは知らない。真の生きた記述的な文法というものはむづかしいものである。しかしアメリカの國語教育は一般にこの新しい方向に向つて苦しみつつあるのは事実である。言語の生きた記述や説明は、いつもこの種の *uncertain*。

に苦しまなくてはならないのは、いわば宿命的だとも云える。いずれは学年の進むと共に従来の品詞の区別も教えてゆくであろう。これではなくては、初等中等教育における国語教育の記述と説明における *certainties* を伝えることができないからである。 *certainties* を得るために、生きた説明を苦しい枠にしめこまなくてはならないのである。英語が品詞的には、日本語より流動的であるため、アメリカの初等中等の国語教育では、それだけの苦惱がある。

七

この苦惱は苦惱であるけれども、アメリカの新しい国語教育はむしろそれをこえて意味そのものの方面に重点的にむかっているのである。単に形式的な区分の仕方が十全に行われえたとところで、それが言語のアクティヴな作用に対してみずからをまもり、それを利用してアクティヴに働くについて一般の人に何の力になるであろう。直接言語使用について意味の分析をすることがそのための修練の基礎として一切である。言語的表現の分析をするといったのも、実は意味論的な分析であり、殊にそのプラグマティクスのな解明である。その意味論というのも日本で常識的に考えられているものではなく、新しい記号理論に縁を引く *semiotics* の陰翳が強い。 *We Have Free Will* と *Yes*、また同じ様式で、 *We Have not free will* と *No* のを聞くこともある。いずれも強い情緒的な色調をもつ表現であって、用いる場合によっては人々を十分にその一方に惹きつけることができる。そしてこの二つは全く

反対のことをいっているけれども、そのいずれを是とすれば他を非としなくてはならない種類のものではない。それが訴える情緒によって、その使われる場合によっては、いずれも真としてわれわれに映じて来るのである。これは二つがより大いなる真理のそれぞれ一部分として存立するところから相矛盾しないことにもよるかも知れない。しかし一般にはそこまで哲学的に考える人もない。ただ情緒的にその場に適合した雰囲気にひたりつつ、われわれはこの何れにも納得の心持を捧げている。

これは、同じ一本の木が近くから見れば緑であり、遠ざかって見れば青いのと事情は同じであろうか。木の色の場合は同じ一本の木である。ただわれわれが距離を異にして立ち向うために異って映ずるばかりであって、或はそれを緑といひ、青という矛盾は木自体の知るところではない。しかしわれには自由意志があるというのと、ないと唱するのは、距離の差ではない。その時の *tree will* の意味自体が異っているのである。否、くわしく云えば、 *tree will* という語の意味よりも、それがわれわれとの間に結ぶ関係が、二つの場合では異つてゐる。差はむしろ *Pragmatic* 的である。科学の言語をもふくんで、あらゆる言語表現に意味的に見て、何らかの程度でプラグマティクスのでないものはない。アメリカの国語教育でも、英語の古典作品はよく読まれている。しかしその取り上げ方は、ますますプラグマティクスの分析であり、プラグマティクスの自然覚を養成し尖鋭にするのが、今日と今日来後のアメリカの一般国語教育の理念であると思われる。